

# かるね

8 月



(平日 8:50 ~ 18:30)  
(土曜日 8:50 ~ 16:30)

学習院大学図書館 運用課

## 図書館を求めて——中国訪問

図書館を見学——中国流に言うとは参観することが目的であったとは言え、10日間で12の図書館を駆けまわるといふ貪欲な中国の旅であった。しかもその間隙をぬって新華書店(新刊本)・中国書店(古書籍)をあさり、万里の長城・故宮博物館もちゃんと見て街も適当に歩きまわった。私の個人的なハイライトは長城からの帰り途、アジアのロゼッタ・ストーンとも言うべき居庸関と、北京の首都図書館にある石経群にこの手で触れ得た事であった。今はまだあまりの盛り沢山の印象で混乱しているので、最後に訪れた上海の復旦大学のことを記そうと思う。

ここは文理合わせ15学部からなる総合大学で、学生は4千人。驚くべきことに、教員系列に属する職員が実に2千人という。教授・助教授だけでも200人も居る。図書館の座席700余は我国の状況から言うと非常に多いが、これが満員であった。閲覧室が静かな熱気に満ちているのを感じながら、試験期だけ満員になるのが図書館のことを思い起す。蔵書180万冊も多いが、図書館の職員100余名というのも驚きであった。

これが朝8時から夜10時までという長い開館時間を可能にしているに違いない。夜の方がかえって混むというのは寄宿制だから、テレビが普及していないから、というだけではない。やはり社会の要請や期待と、それを意識する学生自身の意気込みによるものだろう。気の遠くなる程の長い歴史を持つ国が、いま再び自らを変えてゆこうとしている意識の若さの一面であるのかも知れない。

この旅行を通じて何よりも羨しく、自らの図書館を省みて、恥かしい思いであったことは、訪れたほとんどの図書館に、日本語で応待のできる若い職員がいたことである。これはほんとうに痛烈な一撃であった。(佐野)

☆佐野氏は、今年3月に10日間ほど中国に渡り、12の図書館を見学して来られた。2度目の訪中である。

## 桜の季節

今年も構内のあちこちで桜がこの時とばかりに咲き始めた。特に正門の近辺が一段ときれいな気がする。何故か入学式に合わせたように咲き始めるのが不思議だ。

新入生が入学してくると学内がなんとなく活気づいて来る。彼らに図書館の説明を毎年行なっているが、どれだけその説明が頭に残っているか非常に疑問である。そんな危惧を胸に説明していると、しだいに適当な所で切り上げたくなる。

「百聞は一見にしかならず」と言われるが、図書館も耳から聞いただけでは、その利用方法はなかなか解りにくい。新入生に限らずいまだかつて図書館の本を手にした事のない学生も、まず本を借りてみることである。初めて利用してみてもその方法も価値も解ってくる。

4年になって初めて本を借りに来る学生がけっこう多いが、今年の新入生にはそうならないことを期待する。

## 今月の展示

### -----「百人一首」その注釈書-----

4月は百人一首の注釈書を宗紙抄から現代までを集めて展示してある。もちろん当館および研究室所蔵の本に限られているが、それでもかなりの量になった。

季節は春、そこで紀友則の

“ひさかたの光のどけき春の日に

しづ心なく花のちるらむ”

を選び、その注釈の種々相違を現代までの数々の注釈書によって追ってみた。当館指定の貴重書もあります。是非、閲覧して下さい。





## 参考室へどうぞ!

参考室に入った右側に机がひとつ入り、参考係が皆さんをお待ちしています。求めている情報・資料が見つからない時、遠慮なく申し出て下さい。

図書館の著者・書名が解っている場合は、著者書名目録をひけば簡単に捜せます。テーマが明確な時は、分類目録をひけば求める資料が得られます。しかし、一定の約束に従って作成されている目録を自由自在にひけるようになるには一定の期間が必要です。目録の利用方法も含めマンツーマンで資料を捜すお手伝いを致します。図書館の性格上、あるいは能力上答えられない質問以外は回答できるよう全職員でつとめますので気軽にお出かけ下さい。

今までにこんな質問がありました。

- ・国民総背番号に関する文献をさがしている。
- ・武者小路実篤の随筆「蝸牛独語」の出版事項を知りたい。
- ・Hans Morgen thau とはどんな人? …… 等々。 (久保田)



Mashimo.

小生はかの女子短大図書館からトレードされた者でございます。

基本的には、以前からの食しい経験、をさりげなく生かし、ない知恵を和ワットしぼって、何んとか平和に生きていきたいと考えております。皆様方の暖かい御声援と御協力を……、申し上げる次第です。どうかお互いの幸せの為に、又人類平和の為に、よろしくお付き合いの程を、お願い申し上げます。小生の幸せの為に乾杯!(真下)

[追伸……皆様方の為に。]

## New Face



Kitamura.

スニーカーから皮靴に、はきかえた。これからはこの靴で歩いていく。人生は一本道だから時々どちらか選ばねばならない事がある。そしてその選択が間違っていたかどうかは終生解らない所がまた面白い。「陽の当る場所」ばかりを選ぶうとは思わない。だが一生の内、一度や二度は「やった!!」と飛び上からみたい。毎朝、余り生えない髪をさりながらそろそろこの顔に責任を持つなければ、と思っている。(北村)

※お二人に暖かい御声援を!!



↳ 館外貸出しについて

禁帯出の指定がある図書以外は、以下の通り貸出します。

- ① 3冊まで2週間貸出します。但し逐次刊行物は貸出しません。
  - ② 4年生で「特別貸出」の登録を済ませた方は、「通常貸出」とは別に3冊までを1箇月を期限として貸出します。
  - ③ 大学院生は6冊までを1箇月を期限として貸出します。
- ※ ②, ③ 共、逐次刊行物(最新号を除く)は1週間、  
南架図書館の本(S記号表示のある本)は2週間の貸出しです。

(野村)

読書三昧 I

——三島由紀夫『金閣寺』——

孤独な一寺僧の暗黒の内奥で炎が燃え盛る時、金閣はその細身の柱に壮麗な劫火の衣裳を纏い、金砂子をあたり一面に撒き散らし、眩いばかりの一本の火柱と化すであろう。その時、金閣はたとえようもなく燦然と光り輝き、それがとり得る最も崇高な悲劇的な美を実現するのであろう。

幼時から父に聞かされた金閣の話をもとに、主人公「私」は途方もなく美しい幻影を築き上げた。金閣は絶対的に美しいものでなければならなかった。若葉の山腹が西日を受けて照り映える時、遠い田の面が日にきらめくとき、あるいは山あいの朝陽の中から金閣は聳え立った。金閣は光とともにあり、その光彩の中に「私」をも包み込み、「私」と共に在った。しかし、父に連れられて、現実の金閣を見たとき、「私」の幻影は無残にも打ち砕かれた。「それは古い黒ずんだ小ぼけな三階建にすぎなかった。」一旦は失望したものの、再び金閣は「私」の心の中でその美しさを取り戻し、以前よりもむしろ鮮明に堅固に実存するようになった。だが、それは以前の親しみをもった金閣ではなく、「吃り」

によって「私」が隔絶されていた外界と「私」との間に立ち  
はだかる圧倒的な美の力に変容した。「私」が外界に躍り  
出るためには金閣は滅び  
なければならなかった。

父の故郷での五月のある  
日、「私」が海機生の美しい  
装飾を施された短剣の鞘に  
ナイフで二三条の醜い切り  
傷を彫り込んだとき、すでに  
その運命は孕まれていた。



また「私」が抱ろうとした有為子の白い弾力のある匂いを  
放つ官能的な肉の彼方に見たものは金閣ではなかったのか。  
美に直面したとき常に「私」は言葉を失った。南禅寺の樓上  
から垣間見た男女の別れの儀式、その最中に華美な着物  
の襟元からあらわになった女の白い豊かな乳房はどんな解釈  
をも拒んだ。行為だけが美に打ち克つる唯一の手段だった。

「私」は常に明るい世界に憧れた。「私」の「吃り」を受け  
容れてくれた、透明で単純な心の持ち主鶴川は「私」の「陰」  
が「陽」に転化しうるただ一人の救い手だった。しかし「私」  
の暗い欲望が、娼婦の腹を踏みにじった足裏に逆る  
喜びを感じたとき、その希望は潰え去った。そして「私」と  
同じ不具者 柏木と行動を共にすることによって、悪徳は  
破滅へと突き進む純粹な生のエネルギーへと転化した。

かくして金閣は滅びなければならなかった。左大文字山  
の頂きから、爆竹のはぜるような異様な音を聞き、金閣の  
頭上に火の粉がきらめき舞うのを見下ろしながら、深い安  
堵の煙草とともに「私」は「生きよう」と決心した。

(河西)

※三島由紀夫全集 10巻 (9/3.7-140-10) に「金閣寺」  
は載っています。興味を御持ちの者はどうぞ。

他に、金閣寺を題材にした「五番町夕霧楼」水上勉 (S.91982-21-29)  
がある。

—— あとかき ——

春です!! 春の陽光が眩しいくらいに、木々に花々に、人々の上に降り注ぐ。梢の鳥たちは楽しそうに囁り、遠くには春風をうけてほっかり、雲が散歩して。四季のはっきりしている日本は恵まれている。その中でも春といえば桜、桜といえば門出の季節を思い浮かべる。人生のひとつの節目となる時期でもある。どんな人生にも必ず節目はあるものだ。今年も新たな旅立ちを迎えた人も多いただろう。80年の春がその良き節目となるよう祈りたい。この図書館にも新しい出発を迎えた人が二人。閲覧業務に当たります。みなさんも暖かい心で応援して下さい。

—— あとかきのあとかき ——

桜が咲き始める頃出そうと思っていた「かるね」、四月になると行事も多く、桜が散り始める頃になってしまいました。うまく行かないものです。次回頑張りたいと思います。

製作・著作  
学習院大学図書館  
運用課 かるね編集委員  
目白1-5-1. Tel. 086-0221  
内線 378  
4月21日(月) 1980.

✦ 4月30日は、図書館法公布30周年にあたります。